

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
October2023

No.43 【特集】
共に歩いて考える：交流と学び

今年度の連続特集「共に歩いて考える」の第2弾は、国内助成プログラムによるエクスカージョン企画、その交流と学びの記録をお届けします。その他の記事も充実の秋号をお楽しみください。



サ

サッカーボールがゴールに吸い込まれる瞬間、競泳スイマーが0.01秒の差でタッチする一瞬、バスケットボールがリングを通過するその時。これらのスポーツの「結果」に私たちは感動し歓声で称えます。選手自身にも最高の瞬間です。一方で、その一瞬の結果までの日々の鍛錬や、喜びの背後にある葛藤や苦悩といった心の風景は、いったいどれほどの人が想像しているでしょうか。トップアスリートは圧倒的な身体能力やスキルを持つ一方で、自身の心の内に秘められた深い闘いがあります。プレッシャーや怪我などによる不安、緊張、恐怖、絶望といった競技の葛藤だけでなく、キャリアの不確実性、アイデンティティ葛藤、プライドや劣等感、日常生活と競技のライフバランス、多様な周囲との人間関係などが、選手のメンタルヘルスに、そして一人の人生としてのキャリア全体に影響を及ぼすことが多くあります。

この内面の闘いが表面化されない理由の一つに、選手が心の状態を他人に伝えることの難しさがあります。なぜ難しいのか。たとえば、社会のアスリートに対してのイメージです。「不屈の精神」や「決して諦めない」といったイメージは、選手自身の心の本当の状態を声に出しにくくさせるものです。また、たとえば「言ったとしても、それが社会に理解してもらえない」と選手側が感じていることもあります。

心

の状態の説明は難しいです。もしも身体問題であれば「骨折」とか「胃腸炎」と言えば、怪我や病気の様子がなんとなくもわかってもらえます。しかし「心が疲れた」とか「心が折れた」と言っても、それはいったいなんのことなのか。それこそ言った本人にすらわからないかもしれない「状態」です。

わかりにくい、見えないものには、社会で勝手な憶測で議論できることは感慨深く感じました。

ア

スリートが内に秘める「心の風景」を公に語ることに難しい理由には、選手側のメンタルヘルスマネジメントに関する知識の度合いにもあります。「言葉にするってどういうこと?」「心の状態を声に出すメソッドって何?」といった知識が必要です。目に見えない、本人にしかわからない「心の風景」を言葉にして表現できる能力を身につけると、いわゆる「心の現状把握」ができます。「今、自分はどんな悩みを持っているのか」、その悩みに対してどのような感情を抱いているのか」といったことを言語化できると、具体的に悩みの種類に合わせた対処行動を作っていくことが可能になります。身体の状態把握



マレーシアの NGO 「Dignity for Children Foundation」が主催している芸術教室「Art X Dignity」の子どもたちが描いた作品。難民や貧困家庭の子ども・若者の教育支援の一環として、平日に子どもたちにスペースを提供。これら作品は販売もされ、自立支援につながっている。

Presented by Ayako Kouno

CONTENTS

FIRST WORD ● 田中ウルヴェ 京
アスリートの心の中の風景から互いに学べる場を …… 2

【特集】共に歩いて考える：交流と学び

国内助成プログラム同窓会企画エクスカージョン …… 4

わらしべワークプロジェクト実行委員会
かみいけぶくろ探求と対話と木質文化ネットワーク
江戸川みんなの防災プロジェクト
としまこどもつながるプロジェクト検討チーム

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿
国際助成プログラム ● 中川真規子
実習生がつなげる地域と人の輪 …… 14

研究助成プログラム ● 歌川達人
当事者と研究者が両輪となって社会に発信していく …… 16

国内助成プログラム ● 岡元一徳
ひとりひとりが自分らしく生きて行ける地域と環境づくり …… 18

トヨタ財団×東京大学未来ビジョン研究センター (IFI)
協働事業プログラム「つながりがデザインする未来の社会システム」… 20

「私」のまなざし ⑦ 間辺利江
国境のない感染症パンデミックへの対峙 …… 22

トヨタ財団シンポジウム「みんなと考えるメンタルヘルス
—『アスリート』という生き方を事例に—」 …… 24

BOOK REVIEW ● 豊田光世
風土的視座を地球環境学に組み込む …… 27

国内助成・研究助成・国際助成プログラム
2023年度プロジェクト一覧 …… 28

トヨタ財団ジャーナル
マレーシア出張レポート 他 …… 32



2023年2月22日東京国際フォーラムで開催したトヨタ財団シンポジウム「みんなと考えるメンタルヘルス—『アスリート』という生き方を事例に—」において、田中ウルヴェ京さんにご登壇いただきました。詳しくはP.24参照。

アスリートの心の中の風景から互いに学べる場を



スポーツ心理学者/博士(システムデザイン・マネジメント学)
田中ウルヴェ 京

も出ます。心の状態を吐露すると励ましてくれる人も多いですが、「負けた言い訳」「メンタル弱い」「だったらやめろ」といった言葉が出たりもします。さらに、選手の私生活さえ露出されるソーシャルメディア時代。一挙手一投足が共有され、そのたびに「アスリートとはこうあるべき」「今、あなたはもっと練習すべき」という勝手な理想像との比較で批判が寄せられたりします。自分の心の状態を語ることはリスクと感じるアスリートは多いのです。

このような風潮の中、五輪金メダリストたちが集まる「トップアスリートのキャリアにおけるメンタルヘルス支援の重要性」を声に出し始めました。2019年の国際オリンピック委員会フォーラムでは競泳の五輪金メダリストのマイケル・フェルプス氏が「金メダルを何個も取っていた頃、自殺を考えたこともあった」と、表面的には幸せの絶頂期にあっても、心の苦悩があることを明かし、また引退後には「アスリートではなくなった自分はいったい誰なんだ」というアイデンティティ葛藤の事例も挙げました。

日本でも2023年2月「みんなと考えるメンタルヘルス—『アスリート』という生き方を事例に—」が開催され、私も登壇しました。会場には登壇者だけでなく多くのトップアスリートの顔もありました。私自身、30年前に競技引退後の心の葛藤を抱え、そのことがきっかけでスポーツ心理学を学んだ元アスリートです。2000年初めに日本に帰国後、「トップアスリートのメンタルヘルスとキャリアの支援が諸外国では始まっている」と説明しても批判されることが多く、競技団体の指導者側からは「心のことは選手本人が一人で解決すべき。引退後のことは現役中に考えてはいけない」といったお叱りをいただいたことがあります。当時に比べれば、このようなテーマ

によって、自分の体にあつたケアや筋トレができるようになることと一緒です。こういった心理的能力は現役時代にはパフォーマンス向上に有益ですし、引退後には新たなキャリアで転用できる能力になります。「なんとなくモヤモヤ」「大好きだった競技なのに、今は練習が苦しい」「なぜやる気が起きないんだろう」「引退後の人生はどうすればいいんだろう」「なにが人生の成功かわからない」といった心の病気ではないけれど、自分の人生にとっては深刻な問題は、言葉に出し、整理することによって、解決法が見つかります。こういった心に関する学びを、現役アスリート、元アスリートみんなが安心して互いに共有できる環境を作りたいと思っています。

● 田中ウルヴェ 京(たなかウルヴェ みやこ)

1988年にソウル五輪シンクロ・デュエット銅メダリスト。引退後、日・米・仏の代表チームコーチを10年間歴任。米大学院修士修了(スポーツ心理学)。2021年慶大院で博士号(システムデザイン・マネジメント学)。トップアスリートから経営者、医師等の心理コンサルティングに携わる。慶大特任准教授、IOCマーケティング委員などを務める。

【特集】
共に歩いて考える
：交流と学び



懇親会の様子

国内助成プログラム「同窓会」企画 エクスカーション

目まぐるしく変わりゆく現代の社会状況に対峙するなかで、その変化に柔軟に向き合いながら自分たちの地域の持続可能なあり方を見据え模索する——。トヨタ財団「国内助成プログラム」では、そのような地域を支えるコミュニティを育む仕組みづくりや担い手の育成手法を手探りし、全国各地でそれぞれの地域に暮らす一人ひとりを起点に地域の課題と向き合い、地域の未来を視野に入れながら日々の活動に取り組んでいる市民や研究者、企業、行政関係者等の多様なアクターから多角的に提案し実践いただくことを目的に助成事業を実施しています。

助成事業に伴う活動の一環として、国内助成グループでは昨年より、これまで「国内助成プログラム」(旧地域社会プログラム)の助成を受け、全国各地で活動してこられた助成対象者同士が共に集い、交流を重ねながら経験や学びを共有し深め合う機会を創出すべく「同窓会」企画を不定期ながら開催しています。

今春に開催した第2回では、都内近郊の助成先の皆様のご協力を得て、活動地域を実際に訪問し、関係者の方々との対話を重ねながら、互いに気づきや学びを共有し合うエクスカーションを行いました。取り組み内容に関わる地域内のさまざまなスポットの見学や、参加者の方々との交流が、各々の今後の取り組みにそれらの「経験」を活かし実践していく機会となることを願っています。

アルムナイネットワークの形成に向けて

国内助成グループプログラムオフィサー（PO）武藤良太×鷲澤なつみ



国内助成グループでは、国内の市民活動団体やNPO等を対象とする公募型の助成プログラムを開始した当初より、「市民性」の追求を助成活動における柱の一つとして考え、市民意識を醸成することを目的にプログラムを企画・運営してきました。実際に助成の対象となるのは「プロジェクト（事業）」となりますが、私たちが大切にしていることは、必ずしもプロジェクトが持続的に展開されていくことだけではありません。

重要なのは、取り組みそのものが中長期的な時間軸の中で、形を変えながらも、さまざまな人の手でその想いが脈々と周りの人々や後世に引き継がれていくこと。そしてそこに関わる人達自身が、次なるチャレンジの呼び水となり、地域の中に多様なチャレンジの連鎖を生み出して行く存在となっていくことだと考えます。

そのような存在がたくさん社会や地域の中に育まれていくことが、誰もが社会や地域と向き合い、自分も何かできるかもしれないという人をつくっていくことに繋がっていくのではないのでしょうか。このような動きを生み出していくことも財団の重要な役割だと思っています。



アルムナイネットワーク（一種の同窓会的ネットワーク）とは、そのような存在

在を各地に育むための、ひとつのチャレンジであると感じています。国内助成グループでは、これまでも年度ごとの交流機会については、不定期ながら研修や報告会という形で実施してきましたが、年度を超えた交流機会は、その必要性は感じていたものの、事務局のリソースやキャパシティの問題もあり、なかなか実施することができませんでした。

しかし、コロナ禍の影響により、ここ数年間はオンライン上での交流が主となり、対面での交流機会を満足にもうけることができなかったことを受け、このタイミングで年度を超えた同窓生のネットワークを構築しないで、いつするのだ！との想いから、短い助走期間を経て、走りだしてみることになりました。



「はいえ、「ネットワークをつくります！」と言っても、すぐにみんながみんな参加してくれるわけではありません。ネットワークをつくるためにはやはり多くの時間を要します。そこで、まずはアルムナイネットワークの入り口となる「同窓会」と称した企画を不定期ながら開催し、そこに参加いただいた皆さんを対象に、ネットワークへの参加希望やネットワークでやってみたいことなどについて、情報収集を図っていくことにしたのです。」

この「同窓会」企画では、世代や属性を超えて多様な人と人との出会い、さまざまな価値観や考え方に触れることや、各地で取り組まれている多様なチャレンジやその結果を見聞することも、その二つがこれまでも高かったこともあり、そのような交流や学び合いの時間をできる限り持てるように意識しながら企画を立てることにしました。

以上のような考えに基づき、過去10年ほどの助成対象先にご案内を出したところ、2023年3月18日に実施したエクスカーションには40名近い方々にご参加いただき、参加されたみなさんの感想をお聞きしながら、このような場の必要性を事務局として改めて強く感じる機会となった次第です。

本特集記事はそんなエクスカーションの記録であり、感想や意見をまとめてコラージュしたのですが、これらを参考に、将来的にはさらにネットワーク参加者からの持ち込み企画や、「やりたい！」を応援する場としても機能させていくことができると考えています。



プログラム内容
(町田市/定員6名)

- 12:30 開場
- 13:00 挨拶・流れの説明/参加者自己紹介
- ・ワークプロジェクトの概要説明
 - ・わらしべに関わる地域関係者の説明
 - ・わらしべに関わる地域関係者のインタビュー動画の視聴
 - ・質問タイム
 - ・参加者が所属する団体の事業説明/質問タイム
 - ・ディスカッション/感想共有
- 16:00 終了



「ひきこもりの方の社会参加」という極めて社会的福祉的要素の強い事業をどう継続するかという議論のなかで、先輩事業者の方がど直球に営業力を課題に挙げていたのが印象的でした。結局は工夫と努力的で、自分たち次第なのだと思います。自分たちも収益化を諦めずに目指し続けたいと思いました。

「ゆどうふ」の職員の皆様のお人柄もあり、参加者の皆さんとテーブルを囲んで和気あいあいとお話することができました。エクスカージョンだけでなく、その後の交流会、翌日の報告会でも、交流を深めることができ、報告会の最後の質問でのキーワードだった「モチベーション」を高めるうえで大変刺激をいただきました。

参加者コメント

エクスカージョンでは、このところZoom会議に慣れている感覚とのギャップが良い意味で大きく、五感をつかって触れ合ったり、体験したりすることができたので、思い出すことができた。この様な機会は、なかなか実現出来ないので、とてもありがたかったです。

受け入れ団体のNPO法人ゆどうふのホスピタリティあふれる受け入れに感謝です。そして丁寧な団体説明で深く理解できました。また団体の弱みを聞くことで、それぞれの参加者が真摯にアイデアを出し真剣にディスカッションできました。



受け入れ団体

01

【東京都町田市】
**わらしべワーク
プロジェクト実行委員会**

【題目】多様な若者が生き生きと社会参加できるまちづくり
—「わらしべワークプロジェクト」

【代表者】辻岡秀夫（特定非営利活動法人ゆどうふ理事長）

【受け入れにあたって】当団体はひきこもりの若者への支援を主事業として2015年に法人化、活動を開始しました。2019年より若者が地域課題を有償で解決する仕組みの確立と地域定着に取り組んでいます。その概要と地域関係者の声などを紹介しつつ、皆さんと一緒によりよい地域づくりについて意見交換できたらと思っています。

受け入れ団体コメント ◎ 辻岡秀夫

エクスカージョンの受け入れ団体となり研修内容を検討したことで、自分たちの地域や取り組みについて他者から見るとどう映っているか、自分たちの強み/苦手な点や活動の特色をあらためて考えるいい契機となりました。ディスカッションテーマは「持続可能な活動を行うための関係づくり」としました。当初は参加団体それぞれの取り組みの持続可能性に置き換えて話し合ってもらう形を想定していましたが、議論の多くは受け入れ団体（わらしべ）をどう継続させるといかについてに焦点化されていたように思います。限られた時間内で議論を深めるには結果的に同一の場面を設定した形で話せた方が議論が深まり、よかったのではないかと感じています（そこで出た意見や視点をそれぞれが持ち帰り自団体の取り組みに活かす形）。

エクスカージョン振り返りトーク

鷺澤 エクスカージョン企画は今回初めての試みでしたが、ずっとやってみたくて思っていたことの一つです。現地を見てお互いに学び合う機会があまりないため、財団がハブになってそのような場を作りたいです。

武藤 実現できてよかったですね。とはいえ、年度末の開催は皆さんのご負担が大きすぎたかもしれません。事務局が2名なのでなかなか手が回らず、告知から開催まで十分な時間がなく、特に受け入れ団体の皆さんにはご迷惑をおかけしてしまいました。

鷺澤 今回受け入れにご協力いただいた団体は、都内近郊で事業をされている助成先をお願いして決めました。プログラムは財団からご提案した部分もありますが、基本的には受け入れ団体の皆さんに考えていただきました。

武藤 その際私たちからは、拠点で話し合うだけではなく、地域に出かけて地域の人たちとどう関わりながら活動をしているのかという点を見てもらって話し合っほしいということをお願いしました。その結果、豊島と上池袋のチームは大雨の中1万歩以上歩いて見て回っていただいたようです。

鷺澤 今回の企画を終えて、ありがたいことに自分のところでも受け入れをしてみたいというお声も、いくつかの団体からいただいたので、不定期ながら今後も続けていくことができると思います。今回は参加者が本当に集まるのかわからず、ギリギリまで事務局もバタバタしていたので、不安がいっぱいの中での開催となりましたが、懇親会でみなさん

が楽しそうに交流されている姿を見て、思い切ってチャレンジしてよかったと感じました。

武藤 懇親会では、当日のエクスカージョンから得たインスピレーションで言葉を決めてピンゴをしたのですが、景品は当日参加できない方々にもご提供いただいて全国各地の品物を集めることができ、ご好評をいただきました。さらなる工夫を重ねてまた開催できると思います。

【わらしべワークプロジェクトのケース】

鷺澤 受け入れ団体のアンケート回答の中に「おばあちゃんの知恵袋のように知識を携えて、大丈夫だよ、みんな通った道だからね」と励ましに来てくださったとありましたが、私たちとしてはここまで狙っていたわけではないので、うれしい副次効果でした。先進事例の視察は一般的ですが、現在進行形のプロジェクトを過去に助成を受けた方も見に行くというのは珍しいかもしれません。

武藤 コメントのひとつに「プロジェクトは誰のためのものか、プロジェクトを継続させることが目的になっていないか考えました」とありますが、これはとても大切な視点で、助成プロジェクトと団体が行っている活動や事業は時間軸や規模がイコールではなく、助成期間が終わっても助成での取り組みを含む活動や事業は続くわけで、助成金や助成期間は飽くまでも一区切りに過ぎません。

いろいろな時間軸の人が入り混じることで皆さんの原点や本質的なことに気づき合えるというのが大事なのかなと思います。

※本特集参加者のコメントは開催後に行ったアンケートより抜粋し、適宜編集を加えたものです。コメントと掲載ページは対応していない場合もあります。ご了承ください。

プログラム内容
(豊島区他/定員 10名)

- 13:00 池袋東口・中池袋公園集合/池袋まち歩き
- 13:40 滝野川まち歩き
- 14:30 上池袋まち歩き・プロジェクト説明
- 15:30 対話・交流
- 17:00 終了



土砂降りの中の開催だったのですが、集合場所ではテンションが下がっていましたが、始まってみると、東京に住んでいたのに知らなかった文脈や取り組みが次から次へと見えてきて、足が濡れていることを忘れるほど楽しかったです。

参加者コメント

エクスカージョン最高でした！荒天のなか傘を差しながら10名近い参加者を誘導するという大変なタスクを、「かみいけ木賃文化ネットワーク」の皆様が素晴らしいチームワークで完璧にやってくださいました。そのおかげで、心地よい時間となり、ご活動の内容の魅力もしっかり理解できました。コースや時間配分も無理なく素晴らしかったです。

全体交流会では、他のエクスカージョンのことも知ることができよかったです。飲んだり食べたりが止まらないようにという配慮や、エクスカージョンからの学びをピンゴにする工夫など、運営の見事さも印象的でした。事務局の皆様と初めて対面でお会いし、短い時間とはいえ思いを生の言葉で聞くことができたことも嬉しかったです。

成果報告会では、各プロジェクトのアプローチや成果、課題など知ることができ非常に参考になりました。質疑応答の時間や交流の時間もあり、つながりづくりとして非常に有意義な時間でした。聞けなかった方の発表資料も配布していただいたので参考にさせていただきます。

地方と都市部でのコミュニティ作りは全く違う部分が多いですが、それでも日本全体の文脈を考えながら参加させていただくとヒントなども多くありました。ありがとうございました。



受け入れ団体
02

【東京都豊島区】
かみいけぶくろ
探求と対話と
木賃文化ネットワーク

[題目] 探求と対話の広場 ―木賃で若者と地域が繋がり思考と実践が循環するコミュニティの創出

[代表者] 山本直 (かみいけ木賃文化ネットワーク代表)

[受け入れにあたって] 東京の副都心・池袋周辺は多国籍化、サブカル聖地、再開発エリアがごちゃまぜに息づく地域です。私たちはこの地域に多く存在する木造賃貸アパート（木賃）の可能性に着目して活動しています。地域と木賃拠点を紹介しつつ、多くの人との関係づくりについて対話したいと思います。

受け入れ団体コメント ◎ 山田絵美

今回のエクスカージョンは、全国の地域で活躍されている方たちが来る（しかも10名も！）ということで、一筋縄ではいかないだろうとドキドキしていました。単に活動紹介するだけでは勿体ない、翌日は成果報告会で頭を使うだろうから、五感が働くような時間が作れると良いのではと考えました。そこで、とにかく活動エリアの豊島区池袋の周辺地域を体感していただくコースを企画しました。

池袋の周辺は、東京の副都心であり、多国籍地域、サブカルの聖地、再開発エリアが混在し、その一方で住宅地がひしめき合うという地域です。

池袋駅近くではアニメの聖地、中華街で食材店を楽しみ、電車に乗って板橋駅から滝野川へ。アートギャラリー、銭湯の見学を経て、本拠地の上池袋地域に移りました。最後に3つの木賃アパート・拠点「山田荘」「北村荘」「くすのき荘」を見学していただいて、ディスカッションという約4時間の長時間。詰め込みすぎたかなと思いましたが、皆さんそれぞれ心に刺さるポイントが異なっていたのは興味深かったです。

終了後の全体会で、「どこに中心があるか分からない、緩さが良かった」というコメントをいただきました。まさに池袋を象徴し、私たちの在り様をとらえた言葉で、とても嬉しかったです。皆さんの五感の筋トレになっていたら良いのですが、本当にお疲れさまでした！



鷲澤 PO

「かみいけぶくろ探求と対話と木賃文化ネットワークのケース」
鷲澤 参加されたみなさんは、池袋駅周辺から板橋のほうへと、バスや電車を使ってたくさん移動されたようですね。「翌日の成果報告会では頭を使うだろうからこの日は五感が働くような時間を作りたい」という趣旨でプログラムを組み立てていただいたようです。
武藤 参加者から『どこに中心があるかわからない、緩さが良かった』と言ってもらえて、私たちの活動の理念が伝わっているようで嬉しかったですとコメントにあります。
しかし実際に現地に行ってみるとディープな感じがありますし、だから地域との関係性を立体的に体感できるんじゃないかと思えます。このプロジェクトは「看板のないお店」という感じがあって、特定のテーマにこだわらずいろいろな切り口で地域をとらえているユニークな団体ですよ（本誌37号参照。ウェブサイトでご覧いただけます）。

プログラム内容
(江戸川区/定員6名)

- 13:20 「STEP えどがわオフィス」 集合
- 13:30 プログラムの紹介と意見交換
- 14:00 シミュレーション・ワークショップ
「つっちー」を大規模災害から救え！～
大規模水害が江戸川区を襲ったときに、江戸川みんなの防災プロジェクトのメンバーで車いすユーザーの「つっちー」が、二つの避難形態をとることを想定して、リスク分析を行うワークショップ。実際の事業で、行政関係者・福祉関係者を行ったワークショップを体験していただきます。
- 15:45 振り返り
- 16:00 終了

参加者コメント

障がいを持った方が避難するとなると、時間もお金もかかるといことが分かりました。自宅や、福祉避難所へ避難する場合もリスクがある事が分かり、他者と協力ができる広域避難訓練を実施することに有効性を感じました。ただ、広域避難訓練するには、個人だけではなく、行政の手が必要であることが分かりました。

地方にいると孤独に感じたり、大勢の初めて会う方々との出会いや他地域のイベントに飛び込むのに勇気がいりますが、トヨタ財団の皆さんの温かさに救われ、者の皆さんの温かさに救われ、非常に交流も楽しく、あっという間でした。雑談や、その中から交流や一緒にアイデアが生まれる瞬間を体験することができ、オフラインの大切さをあらためて認識しました。

大変、有意義な時間をありがとうございました。これまで、他のNPO法人への視察や活動を詳しく伺った経験がなく、この様な機会を与えていただいたことに感謝します。そして、私たちの活動の手法や考え方が、ヒントを与えることが出来たことも嬉しく感じ、そしてこうした機会が増えることで、NPO団体の相互の課題解決になると感じました。

普段は触れることのない分野や地域を知ることができたことがとても楽しかったし刺激になりました。また、地域や取り組みは違えど、同じ悩みや課題感を持っているということも分かり、良い企画であったと感じました。

九州に限らず、さまざまな地方開催にも足を運びたい気持ちです。ビンゴの景品が、助成事業者の方々から集まっているのがとても魅力的でした。また、屋久島と併せて種子島にも来ていただけたら嬉しいです(小声)。

鷺澤 最近国内助成でも防災関係の応募が増えていきます。私たち誰もが関わることなので、関心が高い分野なのでしょうね。

武藤 参加したある方と懇親会でお話した時に、ワークショップをやってみたら車いすの方と一緒に避難するとなると想像以上のことがいくつもあって、気づくことがたくさんあったとおっしゃっていました。都会の特徴かもしれませんが、マンションで隣にどんな人が住んでいるか知らなくて、いざ被災したときに隣に手助けが必要な方がいると知らずに自分たちだけ避難してしまうことがあるかもしれません。ですから、平時から知り合ったり関係性を築いたりということがとても大事で、今回はそれを見える化したワークショップになったのではないかと思います。

鷺澤 受け入れ団体のコメントの中に、「活動分野が違っても応援しあえる温かさに触れあえてよかった」とありましたが、活動分野の異なる方々と交流・学び合いあえるのも、この企画の1つの魅力かもしれませんね。

武藤 参加したある方と懇親会でお話した時に、ワークショップをやってみたら車いすの方と一緒に避難するとなると想像以上のことがいくつもあって、気づくことがたくさんあったとおっしゃっていました。都会の特徴かもしれませんが、マンションで隣にどんな人が住んでいるか知らなくて、いざ被災したときに隣に手助けが必要な方がいると知らずに自分たちだけ避難してしまうことがあるかもしれません。ですから、平時から知り合ったり関係性を築いたりということがとても大事で、今回はそれを見える化したワークショップになったのではないかと思います。

受け入れ団体

03

【東京都江戸川区】

江戸川みんなの防災プロジェクト

[題目] 江戸川みんなの防災プロジェクト —災害時、誰一人取り残さない地域へ

[代表者] 高橋聖子 (江戸川みんなの防災プロジェクト代表)

[受け入れにあたって] 年代、性別、障がいの有無等その人の多様性にかかわらず、「みんなが助かる」こと、そのためには多様な人同士の知恵と力を持ち寄ること「みんなで助ける」を合言葉に活動しています。ジレンマや、小さな成功体験を皆様と共有しながら、地域で活動するという事について考えて参りたいと思います。



受け入れ団体コメント ◎ 高橋聖子

「江戸川みんなの防災プロジェクト (EMINBO)」は、障がい、性別、年代にかかわらず、みんなが助かる、そのために、力と知恵をみんなで出し合う防災、「インクルーシブ防災」を地域に実装すべく障がい当事者や子育て中のメンバーがともに活動しています。防災は、市民一人ひとり、家族、住民組織、地域の事業者など、地域で暮らし、働く人すべてがかかわるだけに、関係者が多くどのように活動を広げていくか悩みの連続です。

今回のエクスカージョンでは、トヨタ財団の助成金を得ながら、地域の方々と一緒に最前線でさまざまな取り組みをしている皆様と財団のご担当者をお迎えし、私たちの活動内容や、課題感の共有を行うとともに、参加した皆様がどのように地域とかわりながら活動をされているのか、お話を伺うことができました。

子どもたちや学校と活動を共に行うことで、さまざまな人が垣根を越えて結びつくことができること、実施者自身が楽しむことが大事なことで、そして具体的なアドバイス等をいただき、私たちの今後の活動の糧となったとともに、活動分野は違えど、お互いの活動を応援し合うあたたかさに触れることでとても大きな力をいただきました。自分たちだけでは作りえなかった、こうしたつながりをいただいたエクスカージョンに感謝です。

プログラム内容
(豊島区・巣鴨駅・池袋駅周辺/定員 10名)

- 12:15 巣鴨駅集合
- 12:30 フードパントリーにてフード参加
- 14:10 子ども食堂を3か所見ながらバス移動
- 14:40 プレーパーク活動見学とプレーパークリーダーとの対話
- 15:10 WAKUWAKU ホーム、ルームを覗きながら移動
- 15:50 サンシャインシティにて説明・ディスカッション
- 17:00 終了

東京23区内にも消滅する可能性のある自治体が存在するとは知りませんでした。子どもに関わる支援として多方面に印象的でした。プレーパークの現場も初めて。プレーパークになりました。会で拝見し参考になっていた、支援との後半で挙がっていた、支援と自治のバランス(たとえば子どもがフリマの店番をする等、主体性を引き出すアイデア)は留意しておきたいところです。

参加者コメント

WAKUWAKUさんに参加させていただきました。以前から拝見したかった団体さんでしたのでとても勉強になりました。大満足でした。高齢の方には徒歩やバスでの移動は難しいと思いますし、遠方の方も参加できるような構成、一部：現地見学、二部：報告(オンライン可)などいろいろな試行をしていきたいですね^^



受け入れ団体
04

【東京都豊島区】

**としまこどもつながる
プロジェクト検討チーム**

[題目] としまこどもつながるプロジェクト —地域一体で子どもを支えるプラットフォーム

[代表者] 栗林知絵子(特定非営利活動法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク)

[受け入れにあたって] フード活動への参加に始まり、子ども食堂、プレーパーク、NPO、企業などさまざまな関係者による子どものための取り組みを現地にてご紹介します。ぜひ一緒に子どものためのより良い活動を考えてください。

助成選考基準として、応募団体の伸びしろを視野に入れておられるとの話があり、この考えは大変賛同します。成果主義・合理化に叶う意見が勝り、何か大事なものを失う危険のある社会にとって、この考えは必要でう。助成する側の度量が必要でトヨタ財団さんならではと思えました。そして、この度量に叶う団体が多く存在していたことをうれしく思いました。

子ども食堂や居場所づくり、フードパントリーと当方が課題としている場面や運営を見ることができてとても参考になりました。また、交流会は和気あいあいとした雰囲気の中に、本音や参考になる意見をうかがうことができて大変良かったです。

受け入れ団体コメント ◎ 栗林知絵子

私たちのチームは、地域に在住在勤している仲間とともに多様な市民があらゆる手段で「子どもの成長」を応援できるプラットフォームの共創に取り組んでいます。今回のエクスカッションでは、子どもに関する活動を知ってもらい、それらの活動に市民の力をどのようにつなぐかをご紹介します。

具体的には豊島区困窮家庭への食料配布体験のほか、子ども食堂3か所、プレーパーク、そして宿泊機能をもつ子ども若者の居場所を見学してもらい、各主催者が大切にしている思いを聞きました。さらにチームの一員企業であるサンシャインシティの会議室にて、私たちの目指す新しい自治構想のプレゼンテーション後、みなさまとディスカッションも行いました。

客観的なアドバイスや厳しいご意見もありましたが、多様かつ経験豊かな方々にご参加いただき、外部の声を聞く機会がとても貴重でありがたかったです。

全体交流会では、ほかの企画の共有や、これまで助成金により活動がどのように発展したのか、さまざまな方から聞かせてもらい大変参考になりました。キーワードでオリジナルビンゴシートを作るビンゴゲームも楽しかったですし、個人的にはビンゴ景品で一番魅力的だったのはカブトムシの幼虫観察キットでした!

今回はお世話になりました。コロナ禍のため対面でお会いすることもできなかった各団体の皆様や財団スタッフにお会いでき大変ありがたかったです。今後の取り組みや体制などのヒントを多くゲットし、励まされました。同窓会のメンバーとして、今後とも宜しくお願いします。

武藤 さらに「支援と自治のバランス」というキーワードや「人がつながることが社会を変えていくんだな」と思いました」という感想もいただいています。そういう感想をいただく、やってよかった、今後も続けていきたいという思いが高まりますね。

武藤 企業や地域内の関係者とネットワークを作って子どもの支援をしている事業ですが、もともと地域内につながりがたくさんあるチームなんです。

鷺澤 受け入れ団体からは「参加者から客観的なアドバイスや厳しいご意見もいただき、非常にありがたかったです」という意見もありましたが、コメントする側もそれぞれにフィールドを持たれていたり、実践をされている方々だったりますので、当日は様々な視点から活発なコメントが寄せられたのでしょね。



武藤 PO

【としまこどもつながるプロジェクト検討チームのケース】

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿

新たなつながりにより課題解決をめざす。今号では国際助成プログラムから中川真規子さん、研究助成プログラムから歌川達人さん、国内助成プログラムから岡元一徳さんにご寄稿いただきました。



2020年度国際助成プログラム
「助成題目」地方在住インドネシア人と地域の人々が協働してつくりだす「外国人材でつながる」文化

実習生がつなげる地域と人の輪

●中川真規子（特定非営利活動法人地球対話ラボ）

ちが自由にアート活動を行える居場所を学校内に出現させる「気仙沼アート小」です。詳細はホームページを見ていただくことにし

て、ここでは私が居合わせた中で印象に残っている3つのエピソードを紹介したいと思います。

未来を見たようなひと時

2022年7月、気仙沼で働くデイマさんの実家を訪ねました。「息子は元気でやっていますか？」と心配そうに聞いてきたデイマさんのお母さん。現代アーティストの門脇さんがアジアカフェで仲間と過ごすデイマさんの様子や、デイマさんと一緒に曲を作っていることなどをスマホで写真や映像を見せながら伝えると、本当に愛おしそうに見つめていました。

技能実習生と

して働きに行く
と基本的に3年間、国へ戻ることはできません。デイマさんの意思を応援したい、そう思っても離れた地で暮らす息子への心配



息子の日本での様子を見つめるお母さん

はつきない……お母さんの想いに胸を打たれました。

そんな実習生たちが気軽に来られる場所、さまざまな人たちとの交流が生まれる場所になるよう始めた「つながるアジアカフェ」。実習生や地元の方だけでなく、県外からも興味関心がある人がやってくる「とびら」のような場所になりつつあります。

2023年3月、アジアカフェに、地球対話や気仙沼アート小と一緒に活動をした子どもたちがやって来ました。子どもたちはインドネシアの料理を食べてみたり、カフェにやってきた実習生から注文をとって料理を運んだりして、気がつけば同じテーブルに座り楽しそうにおしゃべりを始めました。

子どもたちも海外からやってきた技能実習

生も、共に、地域の未来を担っていく存在です。その両者が出会い、うれしそうに過ごす姿に未来を感じました。こうした景色が、日

本のあちこちで見られるようになるかと思っています。

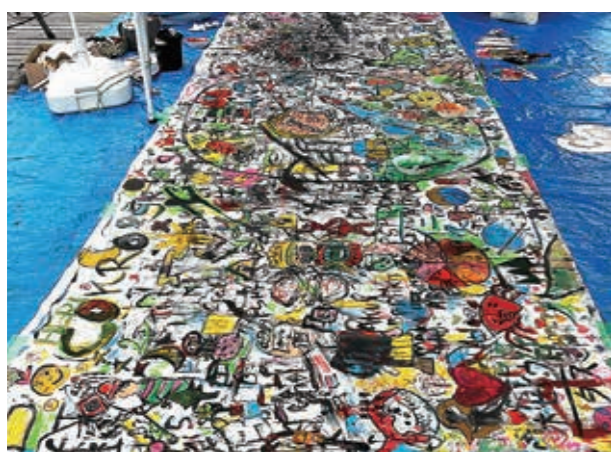
ポノロゴと気仙沼をつないだ大きな布絵

2023年8月に開催された気仙沼みなとまつり&気仙沼YEGインドネシアフェスティバルでは、ワークショップ「ポノロゴの人たちが気仙沼のことを想像しながら描いた絵に、気仙沼で色を塗る」を実施しました。このWSの布絵は7月にポノロゴで開催した「ポノロゴ・アート・プロジェクト」で制作された作品です。当初は、完成した布絵を半分に切り、気仙沼とポノロゴの双方で展示をする予定でした。

ポノロゴで白黒の布絵が完成し、切断セレモニーをやるう！としていたまさにその時、門脇さんが「半分ずつ展示してもおもしろくないのでは」と言い出したのです。突然の提案にプロジェクトリーダーのククさんも戸惑った様子でした。

「素晴らしい絵だからこそ、半分に切るのではなく気仙沼の人たちが色を塗り書き足していつか、この絵が旅をしてポノロゴに帰ってくるのどうか」。続く門脇さんの発言を聞いたメンバーは「やりましよう」と表情を変えました。

こうして気仙沼へとやって来た布絵は、お祭り当日来場者らによって色付けられ描き足されていきました。ワークショップの際、布絵が気になるククさんやポノロゴのメンバーからの電話やメッセージは鳴りやみませんでした。



インドネシアのポノロゴで制作された布絵(右)は、気仙沼で色を塗られ描き足された



他者と対話をし続ける

私たちは技能実習生の出会いはインドネシア・アチェでした。その後、気仙沼で暮らす実習生に出会い、ポノロゴにたどり着きました。実習生自身は、自分たちをきっかけにこうしたプロジェクトが動いていると知らない人の方が多いかもしれません。でもまちがいに、実習生が気仙沼とインドネシア、ポノロゴと私たちを結びつけたのです。さまざまなものを引き受けて知らない場所へと向かっていく実習生という存在が、新たなつながり、文化を生み出す原動力となっているのです。

アジアカフェの運営には地元の若者が加わってくれました。この場が誰かと誰か/どこか/どこかをつなぐ場所として続いていくよう活動していきたいと思えます。その先に、何が生まれていくのかはまだわかりませんが、ただ、こうして可視化されたつながりから対話を積み重ね続けることで、「外国『人材』」と呼ばなくなる日、他者と尊重し合って生きていける社会を目指して歩いていきたいと思えます。

当事者と研究者が両輪となって 社会に発信していく

◎歌川達人（一般社団法人 Japanese Film Project）



コロナ禍で気付かされたこと

コロナ禍で緊急事態宣言が発出され、日本の映画業界は危機に瀕していた。当時、映画館やアーティストへの支援、そして文化の重要性を訴えるドイツのメルケル首相の姿に心揺さぶられ、ドイツと比較し日本の政治や行政を嘆く声を私は多く耳にした。しかし、「行政しつかりしろよ。文化庁は全然わかっている」という声には、手放して同調はできなかった。

というのも、文化庁の職員は国家公務員であって、映画担当であったとしても、特段映画業界に精通している訳ではないということ、構造的に理解していた。政治家も同様である。つまり、もし現状を改善する手立てがあるのならば、「業界の課題や実態を可視化し、行政や社会へ解決案とともに発信すること」だと考えていた。行政側が映画業界の実態を掴んでおらず、支援スキームを検討する際に、困難を極めていた側面も否めない。

映画人は、自らの置かれた状況を可視化し訴えるという責任を、組織として、個人として、業界として、放棄してきたのだとコロナ禍は教えてくれた。同時に、「自分もその責任を放棄しているのではないか」と他者へ向けた批判の眼差しが、自分に返ってきてもいた。調査データとして、日本映画界の実態を調べ、ネットで発信していくことは、何の後ろ盾もない今の自分にも出来るのではないか。独自の立場から行う調査研究であれば、途中で誰かに梯子を外されることはないし、自分でも続けられるのではと考えた。そんな小さな試みとして、スタートした調査が、2021年に運よくトヨタ財団の研究助成に採択された。

研究が採択された2021年以降、映画やアート、エンターテインメント業界で労働環境や性加害の実態が数多く明るみとなった。

日本映画界の実情

私が代表を務める団体 Japanese Film

からだ。「最近では、女性もだいぶ増えた」と権威的な立場の映画人がメディアで情報発信すれば、さも映画界にジェンダー格差がないようになってしまふ。活動を通して、エビデンスの重要性を改めて実感した。

他にも、映画業界における労働実態調査を実施し、低賃金・長時間労働・ハラスメント被害などの切実な訴えが多数寄せられた。この「劣悪な労働環境」と「女性の比率が低い」という事象は、相互に因果関係があるのではないかと懸念が見えた。

その後、調査によって浮き彫りになった課題を解消するにはどういった手立てがあるか、「社会保障」「会計」「ハラスメント対策」と3つのテーマに分けて、有識者を招いたオンライン講座を実施した。他にも、映画界の当事者や外部有識者が登壇するシンポジ

ウムを4回実施した。映画監督、映画スタッフたち、映画祭プログラマー、労働経済学、会計士、社会学、フェミニズム研究、映画史学、スポーツ心理学者、臨床心理士など、多様な立場の方々との対話のプロセスそのものが、学びと発見の連続であった。コロナ禍のため、オンラインでの活動がメインであったが、調査に協力してくださった映画現場スタッフの方々とは、緩やかな繋がりが生まれたように思う。

調査を通しての実感と課題

話は変わるが、国際映画祭にはトレンドがあるようで、昨今それは「当事者性」だと耳にしたことがある。分かりやすい例でいえば、アカデミー賞で黒人差別を扱う映画が受賞しても、表彰式の壇上には白人男性のプロ



①2021年に開催したオンラインシンポジウム「ジェンダー格差、労働環境、日本映画のこれからを考える」の一幕。②③2023年に開催したイベント



JFP ジェンダー調査2021夏より

Projectでは、研究プロジェクトの一環として、映画界のジェンダー格差調査を公表している。興行収入10億円以上の実写邦画作品において、2000〜2020年の21年間で、女性監督は3.1%しかいなかった。監督延数796名に対し、女性監督延数はわずか25名であった。撮影や編集などの職種においても、女性は著しく少ないという結果となった。以前より、欧米の映画業界では、監督やスタッフ、映画表象におけるインクルージョンの重要性が盛んに議論されていたが、日本の映画業界ではあまり耳にしなかった。このようにも、議論出来なかったのかもしれない。「女性が少ない」と発言したとしても、その根拠となる数値が存在していなかったか

デューサー・監督などが登り称賛される。これがハリウッド的な帰結であり、これに反旗を翻したくなる気持ちはよくわかる。他方で、これまで当事者が自らの声を発することが出来なかったのには、いくつもの理由がある。映画界の労働環境とジェンダー格差に関して言えば、当事者である映画スタッフが低賃金長時間労働のため、そもそもアドボカシー活動に参加できない場合が多い。「当事者がもっと頑張るって、団結して、当事者が……」と、課題解決を当事者に押しつける言説に遭遇する際、それは一見正しいようにも思えるが、構造的には無理があるのだと調査を通し改めて実感した。

つまり、社会課題を解決するためには、当事者と共に歩む第三者が重要であるのではないだろうか。当事者の切実なオーダーが通るように、質および量の調査で現状を可視化すること。独自の立場から、構造的な改善につながるような、具体的かつ論理的な提案をすること。それは、当事者が集うだけでは難しく、共に歩める、研究者の存在が必要ではないか。研究プロジェクトを通し、当事者と専門的な第三者の協働が重要であると、改めて実感した。

今後も顕在化した課題の解決に向け、さまざまな立場の方々にお力添えいただきたいながら打開策を考えていきたい。そして、映画界の労働環境が改善され、インクルージョンが高まることによって、より良いメディアが生まみ出され、より良い社会となることを願っている。

「助成題目」認知症改善プログラム「農福リハビリ」の確立と新たな農福連携事業モデルの創造

ひとりひとりが自分らしく生きて行ける地域と環境づくり

農福連携を越えた本質的な課題解決のために

●岡元一徳（都城三股農福連携協議会代表理事）



母の認知症介護から始まった農福連携の試み

私たち都城三股農福連携協議会は、政策の定義である「農業担い手不足×障がい者雇用」という狭義な解釈を越えて、農の効果を活用した福祉課題解決を目指す「農の医療的、福祉的活用」という、独自の農福連携を創造してきました。

それは、作業能力や経済効果を目的にするのではなく、当事者との家族の課題解決に焦点を当て、共生社会の実現に向けて活動を行っています。

活動のきっかけは、私自身の境遇によるも

のでした。専業農家だった父が心臓疾患で急逝し、母のアルツハイマー型認知症が急速に進行、実家の農業経営が急速に悪化してゆきました。私は、母の介護、家業の支援のため介護離職し、郷里に24年ぶりのUターン移住を余儀なくされました。

「畑しごとがしたい」という母の想いを叶えるため、入居する介護施設に小さな菜園を設けたのが、活動の始まりです。菜園には、施設利用者に限らず近隣の高齢者も集い、笑顔と笑い声が絶えない空間となりました。

母は精神の安定を取り戻し、また車椅子の利用者が、除草作業による屈伸運動の効果に



①都城三股農福連携協議会の活動として行った小麦の収穫。②農福リハビリ「わらじをつくろう!」ワークショップ。③④板橋区で行った自然薯栽培と、収穫後にハッピーロード大山商店街で行った販売会の様子

てゆきました。

そして、医療機関、介護事業所に次ぐ、第三の農園「日本版ケア・ファーム」の構築に着手。ケア・ファームとは、福祉先進国オランダで展開される認知症や精神疾患を抱える人、発達障がいのある子どもたちなどにデイサービスを提供する農園のことです。

フレイル世代は、単身者や高齢夫婦が多く、認知症の発見・初期対応が遅れがちです。初動の遅れは、急速な進行、体力の衰退、体調の著しい低下など、瞬く間に重度化へと進行して行きます。こうした初期対応が可能な場所として、そして地域のサードプレイスとして、協議会によるコミュニティ空間が必要と考えたのです。

●コロナ禍における事業推進と成果

しかし、2020年春からのコロナ禍により、医療機関との接触は困難となり、認知症高齢者との『農福リハビリ』活動は、やむなく停止。また、市民参加型として計画した、みんなで作る「日本版ケア・ファーム」も、接触回避のため、外部参加を得ての実施には至りませんでした。

しかし、逆境の時こそ発想の転換は必要！と切り替え、出来ることに全力を尽くす”を指針とし、以下をコロナ禍における目標としました。リソースを集中することで、コロナ禍でも想定を越える成果を得ることが出来ました。

これまでの研究成果を発信し、農福連携の汎用性を広げること

農福連携を所管する農林水産省農福連携推進室と1年間の意見交換を行い、現行の農福連携政策に「農の医療的・福祉的活用」の要素が取り入れられました。『社会参加を促す効果』として反映され、申請要件の緩和と支援制度の活用範囲が拡張されました。

認知機能改善プログラムの更新と精神的変化の定量的・定性的評価軸をつくること

国内の研究機関に積極的にコンタクトを行った。識者によるプログラムの検証と、詳細な認知科学や心理技術を学び更新を完了しました。また、高齢者だけではなく、発達障がいの子どもたちを対象に臨床での運用実施。定性・定量的な評価を採取し2023年秋、学会にて発表

より、自足歩行が可能になるほど回復するなど、複数の利用者に心身共に大きな変化が現れたのです。

閉塞感の漂う介護施設は、「農作業が出来るように」と願った母の一言から、賑やかなリハビリ空間に変化しました。それは、認知症の母親が、最後に私に与えてくれた活動のための小さなヒントになりました。

●地域ニーズと現状のリサーチ、協議会設立へ

農作業の効果を手く活用できれば、「認知症でも住み慣れた場所で、心穏やかに過ごしてゆけるのではないか」。母の介護の傍ら、自らオレンジカフェを主催し独自に調査を始めました。当事者のニーズや家族へのヒアリングでデータを収集し、約2年間必死に駆け回る日々が続きました。

これらの課題解決には、専門的且つ、業種を横断した連携が必要と考え、認知症疾患医療センターと介護事業所の賛同を得て、都城三股農福連携協議会を設立しました。

介護事業所での成果を再現するため、軽度の農作業によるリハビリ・プログラム『農福リハビリ』を自ら開発。臨床・研究経験50年以上のキャリアをもつ認知症専門の精神科医監修の下、3期に渡り試験運用を実施。国内でも、はじめて農作業による認知機能低下抑制のエビデンス採取に成功しました。

さらに副次的生産物として農福連携商品の開発と販売、啓蒙イベント、農福連携をコンセプトとした青果店の運営など、新たな農福連携の要素となる事業をひとつひとつ構築し

予定です。

農福連携事業者ネットワーク基盤を形成し、活発な情報共有を行うこと

農福連携推進のためのノウハウやナリッジが不足していると判断し、Facebookにてグループ「農福連携ネットワーク」を開設。現在、国内最大の農福連携SNSグループに成長し、全国約8000名の参加者が実践のための情報共有や交流を行っています。

更には、東京都健康長寿医療センター研究所とともに、板橋区社会福祉協議会と連携、いたばし総合ボランティアセンターにて都内初の自然薯栽培とそれを活用したプログラム運用を実施。そして、収穫物はハッピーロード大山商店街（板橋区）にて「いたばし農福連携キッチン」を開催し、販売会を実施。800名を超える来場者を集め、都市と地域を結ぶ農福「越境」連携という新たな試みを生み出しました。

コロナ禍による制限は、結果として私の想像力を刺激し、アイデアと推進するエネルギーを与えてくれました。そして、見えてきた本質的な課題解決のために農福連携を越えた事業に昇華することが必要であると教えてくれました。思考のレイヤーを上げて、「包摂的な社会のために何を行うべきなのか」を再考するタイミングであることを学びました。

*本稿の続きはトヨタ財団ウェブサイトに掲載予定です。ぜひご覧ください。

協働事業プログラム「つながりがデザインする未来の社会システム」

トヨタ財団は東京大学未来ビジョン研究センター（IFV）と協働し、研究助成プログラムの新テーマ「つながりがデザインする未来の社会システム」のもと、社会システム変革に向けた研究に取り組む研究者を長期雇用し育成する協働事業プログラムを実施しています。今回は東京大学未来ビジョン研究センターのセンター長である福士謙介さんと、2023年4月に着任した田代さんにメッセージをお寄せいただきました。



新たに
特任講師
が着任！

＜研究計画テーマ＞

自然とのつながりによるGeoAIを用いた地域の気候危機と健康危機への同時適応策の検討

＜プロジェクト紹介と抱負＞

近年、気候変動が加速しており、このまま何も対策を講じなければ人類と地球は気候危機に陥るといわれています。気候変動は自然災害とつながっており、熱

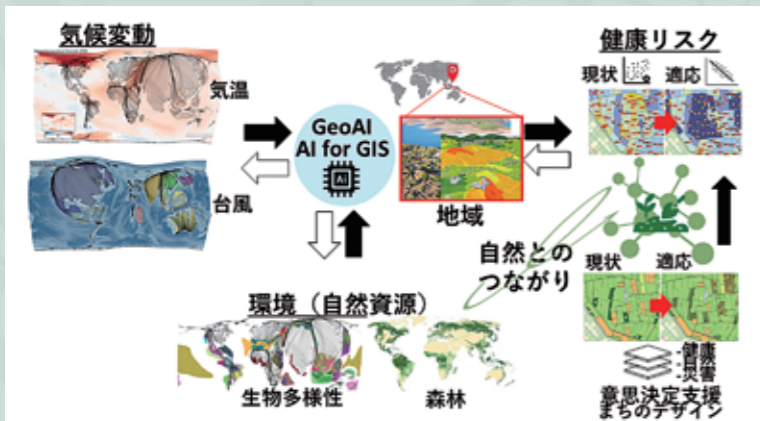
たしろ・あい 田代 藍

東京大学未来ビジョン研究センター特任講師。徳島大学大学院医歯薬学研究部医学域助教、東京大学教養学部附属教養教育高度化機構特任助教を経て現職。専門は環境疫学・健康地理学。自然災害や気候変動に脆弱な地域を対象に、自然資源を活用したまちづくりと生活者の心身の健康との関連に着目した研究を行っている

波や山火事、干ばつ、台風、洪水等は気候災害を引き起こします。世界的には2000年～2020年の間に気候変動による災害が82%も増大しました。一般的に気候変動は主に環境問題や生物多様性問題として捉えられがちですが、人の健康とも密接に関連しています。たとえば、高温によって熱中症や睡眠不足のリスクが高まることがわかっています。また極端な気象現象後につつや不安障害、ストレス増加などのメンタルヘルスが悪化するともわかってきました。

本プロジェクトでは、気候変動によって引き起こされるさまざまな気候危機に対する心身の健康リスクへの対応策を検討します。検討にあたっては、自然を基盤とした解決策（Nature-based Solutions: Nbs）の考えを取り入れます。Nbsは自然と人とのつながりに通じる概念です。2050年までに「自然と共生する世界」を実現するという目標があります。この目標達成にあたっては、気候危機や健康リスク等の課題に順応的に対処し、生態系の保護や回復、持続可能な管理・回復等といったNbsの考えをベースとした人と自然とのつながりを意識した活動が期待されています。

そのNbsをベースとした活動を促すための方策を探るため、研究方法として、主に地理空間人工知能(GeoAI)を活用しながら、どこでどんな気候危機による健康リスクのポテンシャルがあり、そのた



研究の概念図

めにどこのどんな自然資源が活用可能か、複雑なデータセットから時間空間パターンの把握と高度な予測を出力します。個別の地域ごとの気象傾向や土地利用変化の特定ができるようにし、気候変動の種類別による健康リスク指数の開発と空間的探索を行います。加えて適合モデルから今後の街づくりデザインの提案等、地理情報にもとづく政策者の意思決定支援が行えるようにします。さらに本プロジェクトが地域政策者等に与える影響に関する評価を行います。

未来をデザインする、新しいつながりを求めて

東京大学未来ビジョン研究センター（IFV）は2019年に新規に設置された研究機関であり、東京大学の知性を結集した世界的なネットワークの拠点として、地球と人類社会の未来に関連する学際的かつ社会連携型の研究を推進し、持続可能な未来ビジョンの創造に広く寄与すること」を目的としている。当センターは2021年より、公益財団法人トヨタ財団と協働事業プログラム「つながりがデザインする未来の社会システム」を実施している。当センターが重要プロジェクトとして、推進している3つのプロジェクト、すなわち、①AI社会における未来ビジョンのデザイン、②地域共生社会を支える地域循環共生圏のデザイン、③未来社会の安全保障と平和構築に関する研究のいずれかに軸足を置き、さまざまな学術分野、ステークホルダー、産業セクター等と「つながる」事を通じ、未来社会をデザインする能力のある研究者を育成することを目的としている。研究者は国内外から広く募り、2022年4月に2名、2023年4月に1名の研究者が着任し活動をしている。なお、センター内ではこの3人を通

称「IFVトヨタ財団フェロー」と呼んでいる。

このフェローの募集は国際的に行い、それに対して、多くの応募があった。厳格な審査の結果、日本人2名、台湾人1名の研究者を選定した。採択されたフェローは今まで経済、環境、災害等の研究を行ってきたおり、東大ではそれぞれの研究に勤しみつつも、地域のサステイナビリティに関する研究を共に取り組んでいる。当センターに所属する多様なバックグラウンドを持った研究者と一緒に研究会を開催したり、地域の方々と共に地域の未来を考えるようなワークショップに参加したり、大学の中にとどまらない「つながり」を研究することがサステイナブルな地域社会設計に貢献する事を信じ、精力的な活動をしている。

未来ビジョン研究センターは、産業界や行政関連の研究者の出入りも多く、特定の学問領域にこだわることなく、未来社会をデザインする研究活動や社会への発信を続けてきている。フェロー達が当センターで新しいつながりを見つけ、ゆくゆくは新しい学問領域を切り開いていく力を身につけ、世界に羽ばたいてくれることを切に望んでいる。



ふくし・けんすけ
福士 謙介

東京大学未来ビジョン研究センター
センター長/教授

新

型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の世界的流行は、私達の日常生活、働き方、友人等とのコミュニケーションの取り方等々を大きく変化させた。一方、感染者数や死者数は国や地域で大きく異なり、その相違の要因は、医学的側面以外にも貧困、慣習、教育レベル、リスクコミュニケーション等々が推測され、社会の格差が健康に与える影響を改めて浮き彫りにした。

本プロジェクトは、過去の新興感染症の経験や、国の経済状態等々が異なるベトナムと日本との共同研究で、COVID-19に対するベトナムの抱える課題、日本が抱える課題を一緒に考えようという趣旨で実施した。研究成果が、国境のない新興感染症対策に資することを願う。

2019年末に中国湖北省武漢市から報告されたCOVID-19が日本で最初に報告されたのは、中国本土以外では、タイに続いて2番目に速かった(2020年1月15日)ベトナムからは、一週間遅れの1月22日に初めて2例の報告があった。しかし、その後、徐々に感染者が増加し死亡例も報告されて行った日本と異なり、ベトナムでは同年7月末までに感染者数540名で死亡者の報告がなく、ベトナムは「COVID-19対応の優等生」と言われた。同時期の日本の感染者数は35000人を超えていた(死亡者数13000名(厚労省))。

我々は、この時期までのベトナムのCOVID-19の状況を調査し、COVID-19感染者の少ない理由、死亡者が出ない理由の探求を試みた。調査対象は、2020年7月末までの558名(男性54.8%)の症例で、内、現地研究者が保健省やメディア等からの発表データを収集し、詳細が確認された544例について解析を行った。年齢中央値35歳で、感染者の年齢は日本等先進諸国に比べると比較的若かった。これはベトナム人の平均年齢(31歳)や平均寿命(76.3歳)の影響があると考えられる。観察期間中、感染者の約60%が国外での感染による輸入例であり、最初のアウトブレイク後、約100日間、空港検疫により確認された症例のみの報告が続ぎ、市中感染例の報告はなかった(図1)「1」。

調査結果として、ベトナムの地域住民のCOVID-19に関するKAP(知識・態度・行動)への影響要因は、年齢と社会経済的背景であることが明らかになると共に、地域住民は、SARS、鳥インフルエンザH5N1のヒトへの感染発生時に学んだ事柄を覚えており、継続して新興感染症への危機感を持っていて、それをCOVID-19対策に生かしていることが分かった。住民達にとって、信頼出来る健康についての相談者が地域のヘルスケアワーカーである。本調査により、住民一人一人の感染対策には、地域のヘルスケアワーカーを通して、正しく必要な情報を、継続して提供することの重要性が示唆された「論文投稿中」。

COVID-19初期に流行したアルファ株より約60%感染性が強いと言われているデルタ株「3」の流行を受けて、ベトナムでは、2021年1月から10月までの間に、人口100000人当たりの感染者数が、それまで最も高い12291人を記録した「4」。特にホーチミン市では感染者が多く報告され、医療崩壊も起き始めた。事態を慎重に受け止めた政府の依頼を受け、国立バクマイ病院(ハノイ市)では、ICU(集中治療室)部長を含めた医師、看護師らスタッフ2000名をホーチミン市に送り、重症患者診療の為に500床を有するICUセンター(Field Hospital Number 16)を緊急設置した。我々は、本ICUセンターでの重症患者の臨床データを収集し、デルタ株による感染の特徴と重症化阻止の為に重症化要因解明の為に臨床研究を実施した。

本研究により、ベトナムでのデルタ株流行時には、COVID-19患者は発症から入院までの期間が長く、重症になってから入院する例が多かった事、重症化(死亡)リスク要因は、一般的に言われている基礎疾患(糖尿病)、呼吸数、酸素飽和度、高齢以外に、ベトナムでの特徴的なリスク要因である、ワクチン接種状況、入院までの日数が影響することが明らかになった(図4)「5」。

ベトナムでは、政府や行政のみならず、住民一人一人の新興感染症に対する意識と危機感が高く、そ

私のまなざし 37

国境のない感染症 パンデミックへの対峙

文・写真◎ 間辺利江
名古屋市立大学

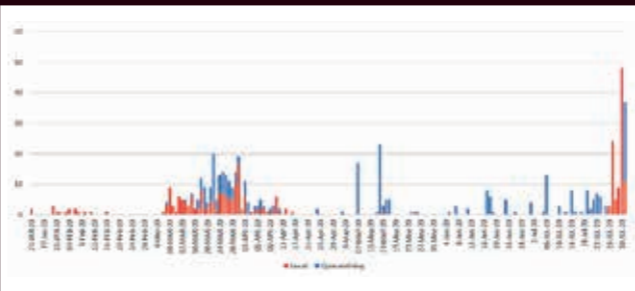


図1. ベトナムにおけるCOVID-19パンデミック初期の感染者数の推移市中感染者(赤) vs. 検疫での感染確定者(青)

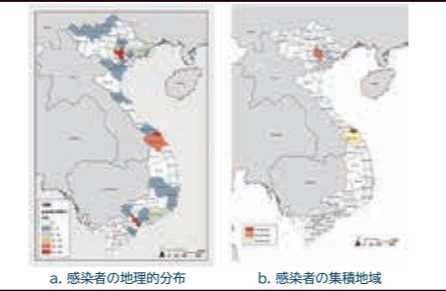


図2. ベトナムにおけるCOVID-19パンデミック初期の感染者の地理的分布と集積地域マップ(2020年1月~7月)



図3. インタビュー調査の為に作成したバナーと調査に協力した現地研究者・ヘルスケアワーカー・医学生達

項目	重症者	生存者	比較
性別	113 (44.3%)	104 (41.6%)	0.88
年齢	44.2 (10.1)	44.2 (10.1)	1.00
職業	113 (44.3%)	104 (41.6%)	0.88
教育	113 (44.3%)	104 (41.6%)	0.88
収入	113 (44.3%)	104 (41.6%)	0.88
家族構成	113 (44.3%)	104 (41.6%)	0.88
居住地	113 (44.3%)	104 (41.6%)	0.88
入院期間	113 (44.3%)	104 (41.6%)	0.88
治療	113 (44.3%)	104 (41.6%)	0.88
死亡	113 (44.3%)	104 (41.6%)	0.88

図4. ベトナムにおけるCOVID-19重症者: 死亡者・生存者の比較

ベトナムは、中国からのCOVID-19の報告後、直ぐに中国との国境を封鎖すると共に、検疫を強化するという迅速な初期対応を行い、先ずは感染者が自国に入らないことに務めた。これには、ベトナムが経験してきたSARSや鳥インフルエンザH5N1感染などの新興呼吸器感染症の患者は、治療介入が遅れると急速に重症化し、死に至ることを医療現場は経験して来ており、限りある医療資源の下での感染者対応には、感染者を出さない事が最も重要であるとの認識が高かった結果と思われる。

一方、観察期間中の症例のアウトブレイクの報告があったハノイ市、ダナン市、ハイフォン市、ハイズオン省は、経済や観光の中心地である。この中でも、我々が統計的に、感染者の集中している地域(集積地域)を解析した結果では、観光や国内の中心都市であることと同時に、病院内クラスターも発生していた(図2)「1」。ベトナム国内のCOVID-19対策には、主要都市や観光地への十分な医療資源の配分、院内感染対策の強化の重要性が示唆された。

COVID-19パンデミック発生から2年が経過した2021年の夏以降、ベトナムでも感染者が急増し、本プロジェクトの進行も難しくなってきた。日本人研究者も渡越出来ない。我々は、当初、地域住民の視点での感染対策の検討の為に、住民への対面インタビュー調査を計画していたが、これまでの鳥インフルエンザに関する研究経験から、農村地域の住民調査には face-to-face による調査が必要であることを経験していた「2」。

更に、当初COVID-19のワクチンが高価であることから、ベトナムでは普及が遅れていたが、日本も含めた各国の援助がすすみ、2021年10月になると、医療従事者のワクチン接種が始まった。これにより日本人研究者は同行せず、ベトナム国内の研究者のみで、現地訪問をして、地域のヘルスケアワーカー、ハノイ医科大学の医学生達の協力の下、対面調査を実施することとした(図3)。我々日本の研究者らは、現地調査の日にはインターネットを介し、集まった地域住民達に挨拶をし、調査の様子を見守った。

の事が、アウトブレイク発生時の迅速な初期対応と感染回避行動の徹底を可能にしていた。当初の迅速な水際対策は、感染発生初期の感染者や死亡者は抑えることに成功した。このことは、医療資源に限りがある国として、重要な感染対策であった。しかし、一旦、感染が爆発すると、ワクチン接種や高価な治療法の提供が十分でない為、重症者や死亡者が多発してしまうという特徴を有していた。

日本では、これまでに、幸いにもSARSや鳥インフルエンザH5N1の感染者の報告がなかったこと、2009年新型インフルエンザの際にも重症者が少なかった事などを反映し、COVID-19前には国民一人一人の新興感染症に対する意識や危機感は薄かったと言える。一方、重症者には、ECMOや抗ウイルス薬の投与など、高度医療の提供が可能であったが、感染者や重症者数の上昇により、COVID-19以外の疾患等の治療や手術、救急搬送などに影響を及ぼし、医療スタッフの疲弊などの問題も発生した。

本研究から、日本は、平時から国民一人ひとりに新興感染症に対する意識を持つこと、世界的な視野を以て、新興感染症の流行やその可能性のモニタリングを実施し、有事には迅速な水際対策を行うこと、有事の医療体制を平時から構築しておくことの重要性を学んだ。ベトナムは、感染や重症化のリスク因子の検証を進め、リスクの高い地域への医療や人的資源の配分をすすめること、住民教育を更に徹底すること、などが、将来も発生し続ける新興感染症パンデミックへの備えにつながることを学んだ。日本-ベトナムそして国際社会の協力が、国境のない感染症パンデミックへの対峙には重要であることが本プロジェクトで明らかになった。

● 間辺利江(まなべ りえ)
2020年度イニシアティブプログラム助成対象者。助成題目「COVID-19や将来の新型コロナウイルス等による感染症に頑強なコミュニティ作り」

Reference
1.Manabe T, Phan D, Nohara Y, et al. Spatiotemporal distribution of COVID-19 during the first 7 months of the epidemic in Vietnam. BMC Infect Dis. 2021 Oct 30;21(1):1124. doi: 10.1186/s12879-021-06822-0. (本プログラムによる成果)
2.Manabe T, Pham TP, Vu CV, et al. Impact of educational intervention concerning awareness and behaviors relating to avian influenza (H5N1) in a high-risk population in Vietnam. PLoS One. 2011;6(8):e23711. doi: 10.1371/journal.pone.0023711.

3.Del Rio C, Malani PN, Omer SB. Confronting the Delta Variant of SARS-CoV-2, Summer 2021. JAMA. 2021 Sep 21;326(11):1001-1002. doi: 10.1001/jama.2021.14811.
4.World Health Organization. Coronavirus disease (COVID-19). Dashboard. Situation by Region, Country, Territory & Area. Available at https://covid19.who.int/table
5.Do TV, Manabe T, Vu GV, et al. Clinical characteristics and mortality risk among critically ill patients with COVID-19 owing to the B.1.617.2 (Delta) variant in Vietnam: A retrospective observational study. PLoS One. 2023 Jan 20;18(1):e0279713. doi: 10.1371/journal.pone.0279713. (本プログラムによる成果)

主催 公益財団法人トヨタ財団

後援 厚生労働省・スポーツ庁

2023年2月22日(水) 14:00~17:00

トヨタ財団シンポジウム

みんなと考えるメンタルヘルス

—「アスリート」という生き方を事例に—

参加費 無料

小塩靖崇 国立精神・神経医療研究センター 研究員	山下慎一 福岡大学法学部 教授 (社会保険法学)	田中ウルヴェ京 スポーツ心理学専攻(博士) 五輪メダリスト	川村慎 横浜キヤノンイーグルス所属 プロラグビー選手	松田文志 JOCアスリート委員長 五輪メダリスト	小川亮 東京国立大学法学部 助教 (憲法学)	吉谷吾郎 クリエイティブ・ディレクター コピーライター
--------------------------------	--------------------------------	-------------------------------------	----------------------------------	--------------------------------	------------------------------	-----------------------------------

メンタルヘルスの課題をトップアスリートや専門家が発信！ “自分ごと”として向き合う大切さを みんなで考えるシンポジウム

2023年2月、トヨタ財団主催のシンポジウム「みんなと考えるメンタルヘルス—『アスリート』という生き方を事例に—」が開催された。同財団が助成する研究プロジェクトの成果の発信の機会となり、アスリートのメンタルヘルスの現状と対策などに関してトップアスリートと専門家による熱い議論が繰り広げられた。

トヨタ財団が支援する助成プロジェクトの成果発表を兼ねて、メンタルヘルスについてみんなで考えるシンポジウムが2023年2月、東京都内で開催された。助成プロジェクトは、小塩靖崇さん(国立精神・神経医療研究センター研究員)の「アスリートの、アスリートによる、みんなのための、メンタルヘルス教育プログラムの開発」と、山下慎一さん(福岡大学法学部教授)の「プロスポーツ選手の『2つの引退』から、働き方と社会保障の関係を考える…イノベティブな社会を支えるために」だ。

第1部では、小塩さんがトップアスリートを取り巻くメンタルヘルスの現状を発表。2019年に日本ラグビーフットボール選手会と共同で「よわいはつよいプロジェクト」を発足し、ラグビートップリーグの男性選手へのアンケート調査の結果、251人のうち約42%の選手が心理的なストレスを感じ、うつや不安障害のある疑いを経験するなどの精神的な不調を経験し、約8%の選手は直近の2週間に「死にたい」と考えていたことが分かった。トップ選手でもメンタルヘルス不調を経験し、周囲に相談しない現状が浮き彫りになり、相談しやすい環境を作る必要があると小塩さん

は指摘した。

同プロジェクトと一緒に立ち上げたラグビー選手の川村慎さんとコピーライターの吉谷吾郎さんも登壇し、吉谷さんは「弱さは誰もが持ち、さらけ出すのは悪いことではない。みんなが弱さを交換し合えば、みんなの強さを活かしかう社会にできる。『選手の悩みを聴く人を増やす』といった社会や環境へアプローチが根本的な解決策」と話した。

アスリートの「メンタルヘルス」とは？

第2部では「アスリートを取り巻くメンタルヘルスの課題」をテーマに、3人の専門家が登壇した。五輪メダリストでスポーツ心理学者の田中ウルヴェ京さんは、トップアスリートになるほどメンタルが強くない自分とのギャップに苦しむ傾向があるとし、また、

精神科医や臨床心理士などがどんなサポートをするのか知らないスポーツ関係者が多いことも指摘。スポーツ界全体でメンタルヘルスリテラシーを高め、支援の構築が必要だと話した。

憲法学の専門家である東京都立大学法学部助教の小川亮さんと、彼のいとこで卓球五輪メダリストの石川佳純さんは、「憲法学から考えるアスリートへの誹謗中傷対策」というテーマで登壇。石川さんは「ネット上の自分への誹謗中傷や、事実とは異なる内容を見たときは落ち込む」と素直な思いを告白。これが「言論の自由」として許されるのかとの疑問も呈した。小川さんは、「メンタルが強いのが当然といった世間のイメージでアスリートが意見しづらい状況は、対等に議論し合える前提の『表現の自由』にはなり得ず、

インターネット上の誹謗中傷が『表現の自由』『言論の自由』によって守られるという話にはならない。インターネットの特性を踏まえた『表現の自由』の新たな定義づけが必要」と指摘した。

「アスリートの『2つの引退』と就労・社会保障」について研究したトヨタ財団の助成対象者で福岡大学教授の山下さんは、アスリートには「現役選手」と「社会人」との2つの引退があると、自営業者や個人事業主が多い日本のプロスポーツ選手は失業保険を受給できず、定年後の年金受給額も正社員と比べると10万円程度低くなると説明。また、山下さんは、「アスリート引退後のお金と職」と「メンタルヘルス」の話をこれまで分けて考えすぎたのではないかと指摘。「現役引退後にお金があれば、あるいは職業に就けれ



①小塩靖崇さん。②左から川村慎さん、吉谷吾郎さん、小塩靖崇さん。③特別ゲストとして登壇された石川佳純さん(左)と、小川亮さん。④オンラインで登壇された山下慎一さん。⑤松田文志さん(左)と、ファシリテーターを務められた田中ウルヴェ京さん。

必ず安泰かと言えはそうではない。引退後の職業が本当に自分のやりたいことなのかと悩む人もいる。自分の人生の最適解が選べるような、相談できる仕組みを用意するなど、生きることに対する総合的な支援が必要だと思う」と話した。

実体験と理論でメンタルヘルスを紐解く

ウルヴェさんがファシリテートを務めた第3部では、小塩さんや山下さん、川村さんが再び登壇し、競泳五輪メダリストの松田丈志さんも加わって、「アスリートと一緒に考えるみんなのメンタルヘルス」というテーマのパネルディスカッションが行われた。松田さんは、「メンタルは『強い』と『弱い』の2極化で考えるのではなく、『自分は緊張している』と気づいてスキルとして修正すればいい。自分が心地よい状態なるための対処法を知れば、気持ち落ち込んでもフラットな状態に戻りやすい」と話した。また、スランプに陥ったとき、チーム種目のフリーリレーだけ調子が上がった経験から、「自分に足りていないのは、他者との関わり」と気づき、チームメイトとの交流を増やしたと言う。

川村さんは、実業団選手として試合に出場できない状況が続いてメンタルが低下し、殻に閉じこもった。だがあるとき、チームメイトに悩みを吐露するうちに自分の心理を俯瞰でき、仲間が川村さんを理解しサポートしてもらえたことでラグビーをする時間が楽しくなったという。こうした経験が、海外のラグビーなどの選手会で導入されている、お金の



キャリア、メンタルといった選手の悩みを各々の専門家が聞くプログラム「PDP」(プレイヤーディベロップメントプログラム)を日本で実現させる活動につながっている。

そんな2人のエピソードから小塩さんは、「他者との関わり」をキーワードに挙げた。「自分の思いを伝えて仲間や友人が聞いてくれれば、自分を受け入れてもらえたという感覚を得られ心が落ち着く」と話した。

勝っても負けても同じ表情で選手を迎える

質疑応答の時間では、あらゆる立場の観客から質問が挙がった。たとえば、「選手のメンタルをサポートする方法は?」という質問には、「見守ること」を小塩さんはポイントに挙げた。「選手が自分の意思でプレーができ、行動を選択できることが大切。見守りながら、

選手の意思決定を尊重するような環境を築けばいい」とアドバイス。松田さんは「例えば、五輪代表になればスポンサーや応援者の期待が大きくなり、それを意識しすぎると五輪を楽しめなくなる。『自分が五輪でメダルを獲得したい』というモチベーションの根源が選手が理解し、それを促すサポーターがいれば選手のメンタルは変わる」と話した。ウルヴェさんは「勝っても負けても同じ表情で選手を迎えてくれるサポーターだとうれしい」と伝えた。

シンポジウムの締めくくりには、「今日のシンポジウムがスタートとなってほしい」と山下さんが話し、松田さんは「自分の心と向き合う時間をつくるなど、メンタルをよい状態に保つスキルを身に付けてほしい」とアドバイス。川村さんは、「よわいはつよいプロジェクト」と「PDP」プロジェクトを広めて、「アスリートだけでなく社会にいい影響を与えたい」と抱負を語った。小塩さんからは、「アスリートが自身の経験を言葉にし、研究者の知見を示していくことが、より説得力のあるメッセージになる」とし、ウルヴェさんは「自分は何の目的があって生きているのか」「人生は私に何を求めているのか」などと自分と向き合い掘り下げていく作業や、心の不調に敏感に気づいて複数の対処法を持つことが大事とまとめた。会場から大きな拍手が起こり、シンポジウムは幕を閉じた。

(構成/高島三幸)

*より詳しいレポート、動画など、トヨタ財団ホームページでも公開していますので、ぜひご覧ください。

BOOK REVIEW



今号の一冊『人新世の風土学——地球を〈読む〉ための本棚』

風土的視座を地球環境学に組み込む

●豊田光世 (新潟大学佐渡自然共生科学センター准教授)

2018年度(特定課題)先端技術と共創する新たな人間社会「人間と計算機が知識を処理し合う未来社会の風土論」(代表者:熊澤輝一氏)の成果物として発行された書籍について、豊田光世氏に書評をいただきました。



●書名:人新世の風土学——地球を〈読む〉ための本棚
●著者:寺田匡宏
●発行:昭和堂
●価格:2,800円+税

人

新世とは、人類の活動が気象や生態系に対して地球規模で甚大な影響を与えていることを踏まえ、新たに提案されている地質年代である。人間と環境の不可分な関係性を改めてわたしたちに認識させる言葉であり、その意味において風土論の世界観とも連動している。ただし、人新世が示唆する人間と環境のかかわりは、和辻哲郎が風土という概念を手がかりに人間の存在様式を論じた1930年代当時の認識から、大きく変化している。和辻の風土論では、あくまでも気象は人間存在の背景的な要素として捉えられていた。しかし、今は違う。わたしたちが猛暑日に激しい暑さを感じる時、そのことを通して外気の暑さを、そしてそこに宿る自分自身を見出すだけでなく、温暖化を引き起こしていると思われる経済活動への反省や、地球の未来はどのようなのかという不安を呼び起こす。人新世において風土を語るということは、環

境危機の時代に生きるわたしたちの存在を改めて問い深めていくこともある。寺田匡宏は本書の中で、そのためのさまざまな手がかりを与えている。

人

文地球環境学の立場から人と自然のかかわりを探究することが、本書のテーマである。実に多様な物語や論考が紹介されている。寺田は、その一つひとつを紐解きながら、わたしたちが環境を捉える視座を広げていく。地球環境を「物語や風景」として捉えること、その中の「未来」の語りに耳を傾けること、本書が提案するそうした視座の根底には「風土」の概念が貫かれている。風土は、わたしたち人間が環境と不可分の存在であることを思い起こさせる。このことは、地球環境学のあり方を問い直すことにもつながっていく。

地

球環境学では、自然を客観的对象として捉えて分析する自然科学が重要な役

割を担ってきた。切り分けることで対象物を理解するアプローチは、環境問題の解明において今後も重要であることには違いない。ただし、そうしたアプローチだけでは問題の全体像を捉えることができない。切り分けられないものを切り分けずに捉えていく……風土的視座を地球環境学に組み込むことは、そうした理解の仕方を生かして環境問題と向き合うことにつながる。さらに、風土が示唆するローカリティと、地球を捉えるグローバルティが重なり合い、世界が多層的に立ち現れる。

本

書が展開するさまざまな語りに身をゆだねてみよう。その中で綴られている言葉を手がかりに、あなたが暮らす地域で、さらには世界で起きている出来事に改めて目を向けて見てほしい。どのような風景や物語が浮かび上がるだろうか。

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
松岡 宏武	避難所運営委員会を通じた次代につなぐコミュニティづくり	510	東京都
尼野 千絵	定住地縁型から流動住民も含むテーマ型自治へ、ゆる自治カンパイ！プロジェクト	573	大阪府

研究助成プログラム

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
山中 司	生成系AIが革命的に変える大学英語教育の新たな方法と概念 —— 教員から英語を学ばないシステム構築と教室環境デザインの実装	500
中澤 未美子	「本当に多様な働き方を促進できる職場」についての研究 —— 障害者雇用の現場でロボットと創る	680
山梨 裕美	動物園でかたちづくりの人と動物の共生の形 —— 動物福祉の評価と実践	670
石川 満佐育	発達支援アプリの導入効果に関する研究 —— 発達支援アプリは学校現場にどのような影響をもたらすのか	680
那須 識徳	傷病後の自動車運転中断者に対するの地域社会参加の支援体制構築	600
菰田 レエ也	ひきこもり当事者と地域プラットフォームの協働に基づく新しい価値観と社会システムの構築	500
下向 依梨	子どもおよび地域社会のウェルビーイングの向上を実現するための、学校を中心とした「システム的な変革方法」の確立	650
原 朋弘	脆弱な社会における民族融和と市場分断の緩和 —— ターゲティングとフィールド実験	400
川口 博子	戦後社会の現在から未来を創造する賠償デザイン —— グローバルとローカルをつなぐ変革的正義の実現をめざして	560
任 喜史	高齢者の健康と学生の学び・愛着の循環を生む地域と地方大学の「つながり」の仕組み —— デジタルを活用した「地域健康サポーター」	660

国内助成・研究助成・国際助成プログラム

2023年度プロジェクト一覧

2023年度に採択された国内助成プログラム9件、研究助成プログラム10件、国際助成プログラム8件のプロジェクト一覧です。

※掲載内容は2023年9月19日時点の情報です。各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

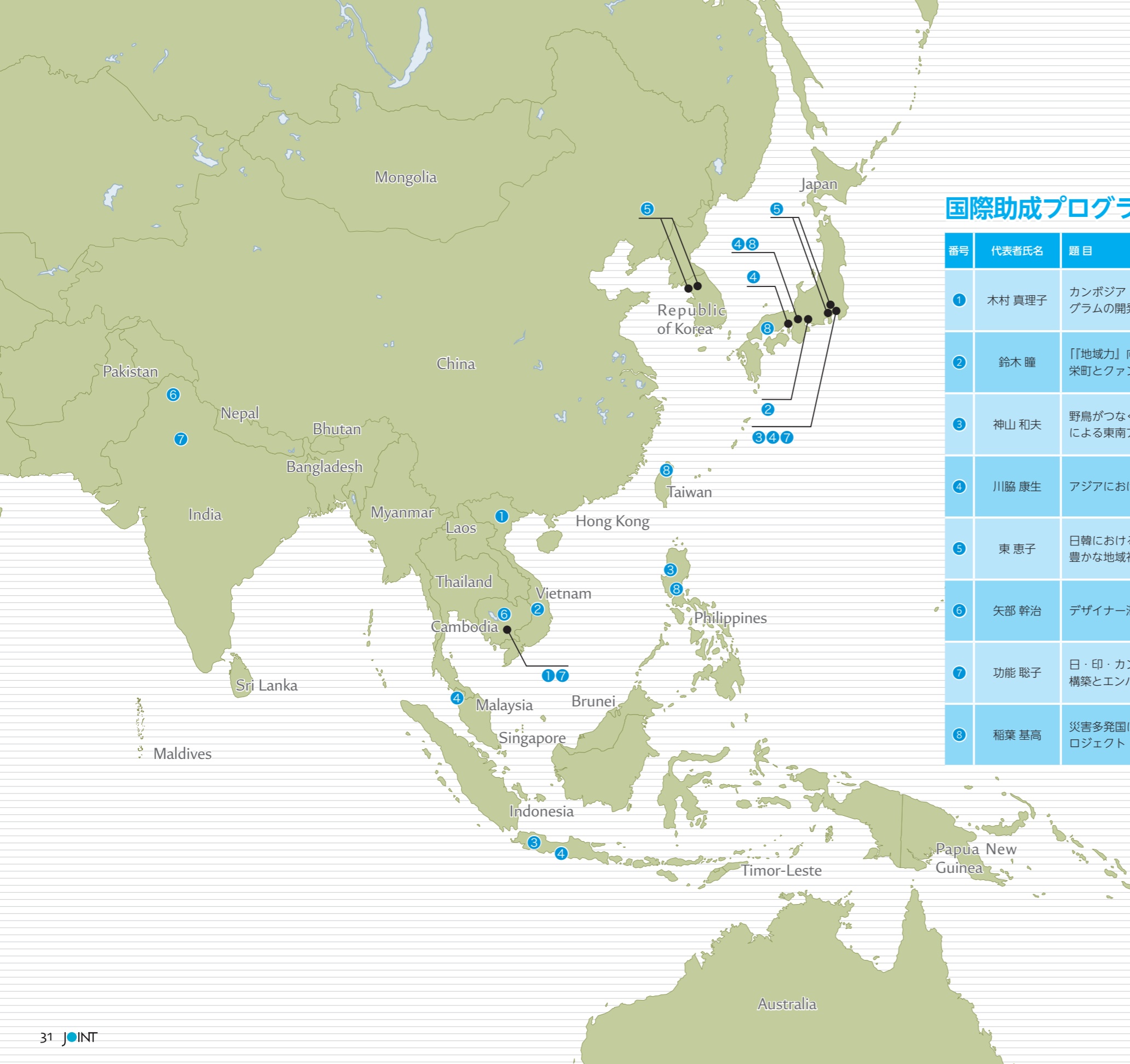
国内助成プログラム

1) 日本における自治型社会の一層の推進に寄与するシステムの創出と人材の育成

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)
檜木隆彦	ミライクエスト 一次世代の自治型社会を担う若き冒険者たちを応援するプロジェクト	1,950

2) 地域における自治を推進するための基盤づくり

代表者氏名	題 目	助成金額(万円)	活動地域
久世 泰男	多様化社会を繋ぐ地域の文化交流の場づくり —— 池鯉鮒大田楽	545	愛知県
津田 江美	デジタル技術を活用した若者主体の地域課題解決型プラットフォーム「蒲郡ハッカソン」	350	愛知県
齋藤 佳太郎	湘南のきさきフルーツプロジェクト —— お庭の未活用果樹を使った地域の新しいつながり創出	600	神奈川県
高野 元樹	AIを活用した地域資源の発掘と地域助け合いネットワークの構築	600	愛知県
石田 雅一	保育を起点とした新しい自治のかたち「みまもりあう児玉」	600	埼玉県
山本 修太郎	危機感・課題意識だけでなく、町場の資源を面白がることから始める地域の自治	542	兵庫県



国際助成プログラム

番号	代表者氏名	題目	助成金額 (万円)	主な活動地域
①	木村 真理子	カンボジア・ベトナムの子ども家庭福祉ソーシャルワーカーの人材育成プログラムの開発と実施	850	カンボジア、ベトナム
②	鈴木 瞳	「[地域力] 向上に向けた観光まちづくり」の相互学習と経験共有～愛知県東栄町とファンナム省ナムザン郡の取組より～	870	ベトナム、日本
③	神山 和夫	野鳥がつなぐアジアの持続可能なコーヒー～野鳥を指標とした環境評価手法による東南アジア2国の持続可能なコーヒー推進事業～	860	インドネシア、フィリピン、日本
④	川脇 康生	アジアにおける市民防災エンパワメントプログラムの共同開発	870	インドネシア、マレーシア、日本
⑤	東 恵子	日韓におけるケアラー支援：ダブルケアラー・ヤングケアラー支援とケアが豊かな地域社会——ケアリングデモクラシー——への学び合い	930	韓国、日本
⑥	矢部 幹治	デザイナー滞在型事業を通じた都市と地域の関係、相互循環の関係作り	850	インド、カンボジア
⑦	功能 聡子	日・印・カンボジアを繋いで学び合う、社会起業家支援プラットフォームの構築とエンパワメント型社会的投資コミュニティの形成	900	インド、カンボジア、日本
⑧	稲葉 基高	災害多発国における多国籍合同訓練を通じた緊急医療支援の相互学び合いプロジェクト	870	フィリピン、台湾、日本



REPORT

外国人材の受け入れと日本社会
マレーシア出張レポート

2 023年6月18〜24日、1週間のマレーシア出張に行ってきました。主な目的は首都クアラルンプールで3日間に渡り行われたアジアン・ベンチャー・フィランソロピー・ネットワーク(ANCF)年次会合に参加することです。アジアで活動する社会投資

くは、仲介業者が手配したルートで、タイを経由して陸路で武装勢力が闊歩するジャングルを越えてくるか、小さな木船で最低限の水と食料を積んで運がよければ漂流せずにマレーシアに到着するそうです。しかし、その途中で人身取引の被害に遭い、漁船で奴隷のように働かされて海に捨てられた、殺害され土に埋められたというケースも報告されているとのこと。お話を伺ったロヒンギャ難民のひとりには、仲介業者に暴力をふるわれ奴隷として売られたものの、何とか逃げ出してマレーシアに辿り着いた話を詳しく教えてくれました。母国で迫害され、避難の道程でも犯罪被害に遭い、行き着いた先でも脆弱な立場に置かれる……、無国籍の過酷さをあらためて感じました。

国 際社会では、急増する難民を支援の対象とみなすだけでなく、雇用や教育の機会を保証し社会の担い手として包摂していくことが重要であると議論されています。



上：RWDNが難民研究会会場で販売している商品で、ひときわ目をひいたのが生理用布ナプキンとロヒンギャ料理レシピブック

下：ロヒンギャ難民が寄付を集めて無償で運営している学校「Darul Eslah Rohingya Academy」。子どもたちは無国籍で政府が発行する身分証がないためマレーシアの大学へ進学できない



AVPN会合のクロージングセレモニーではマレーシア首相のビデオメッセージのほか閣僚が複数登壇し、社会的投資への呼びかけや新たな福祉基金のローンチも行われた

家や助成関係者1300人超が参加した本会合では、全体セミナーや分科会のほかに、1対1の個別面談が行われました。私は20名ほどから面談リクエストが入り、分科会や食事の席で隣り合った人たちもあわせて30名ほどと情報交換を行いました。20〜30代が多く、アジアの若いエネルギーをひしひしと感じた3日間でした。

そ して、せっかくなら同地の移民・難民の支援状況を学び、担当している助成プログラム・特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」に役立てたいと、会合の前日と翌日、ロヒンギャ難民支援団体を視察させていただきました。ロヒンギャとは、ミャンマー西部ラカイン州を中心に暮らすベンガル系ムスリムのこと。ミャンマーでは、隣国バングラデシュからの違法移民とみなされ、民

はからずも、今回視察したいいずれの団体も、教育や職業訓練の機会を提供し、子ども・若者・女性が持つ本来の力を発揮できるようにしたいと奔走していました。クアラルンプールでは、あちこちで高層ビルが建設され、勢いよく経済発展が進む一方、そうした建設現場を支える移民労働者や難民とその子どもたちも増え続けています。AVPN会合へのマレーシア首相のビデオメッセージでは、国内の格差是正と福祉の充実を強調していました。移民・難民の社会包摂も、これからの同国の安定と発展を左右するのではないかと感じました。

日本も近年、介護や建設現場等での人手不足を背景に、外国人労働者が急増しています。いろいろなルーツや背景を持つ人々とともに社会をつくり、子どもたちの可能性を広げていくために、学ぶこと、取り組むべきことが、本当にたくさんあると感じた出張でした。

(甲野)

族アイデンティティや国籍が認められていないため、世界各地に流出しています。正確な統計はありませんが、マレーシアにいるロヒンギャ難民は10万人以上、うちクアラルンプールには4万人ほどが暮らし、生鮮市場や港湾での日雇い重労働、屑鉄拾いなどで生計を立てているといわれています。近年はミャンマーでの弾圧や政情不安から人数が増え続け、マレーシアの移民・難民の中でも存在感を増しています。マレーシアは難民条約に批准していませんが、迫害から逃れてきた人を追い返すわけにもいかず、また労働力になることから黙認状態が続き、難民の多くは不法滞在状態。政府発行の身分証がないため、進学や就職、公的サービスへのアクセスが限られるなど脆弱な立場に置かれています。

視 察では、ロヒンギャ難民が運営する3団体と、マレーシアのNGO2団体を訪れました。最初に訪問した「ロヒンギャ女性開発ネットワーク(Rohingya Women Development Network-RWDN)」は、訪問日に難民研究会に出席しているということ。同会場で昼休みにお話を伺いました。女性の収入創出のため縫製ワークショップを実施しており、ユニクロマレーシアとも協働してパンツ製品の丈直しで切り取った端切れを縫い合わせて小物を制作しているそうです。シンポジウムでも企業と難民の協働の好事例として取り上げられ、研究会合主催者から参加者全員に布ポーチが配布されました。その後、各訪問先で事情を伺ったところ、マレーシアにやってくるロヒンギャ難民の多

INFORMATION

2023年度特定課題公募開始のご案内

トヨタ財団では現在、2つの特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」「先端技術と共創する新たな人間社会」について公募中です。「外国人材の受け入れと日本社会」は、「外国人材が能力を最大限発揮できる環境作り」等の5分野を設定し、外国人受け入れの総合的な仕組み構築への寄与が期待できる調査・研究・実践活動を対象にして、2023年9月4日〜11月18日の期間公募を行います。

「先端技術と共創する新たな人間社会」は、IoTやAI、ビッグデータ、ロボット、ブロックチェーンなど、先端的な科学技術をめぐる社会的課題に対応する研究プロジェクトを対象とし、共同研究プロジェクトと個人研究プロジェクトの2つの枠組みを設け、2023年9月22日〜11月30日の期間公募を行います。

それぞれの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

トヨタ財団ウェブサイト
toyotafound.or.jp





On The Journey

都城二段農福連携協議会が実施する「農福リハビリ」活動の様子 (P.18参照)。
—旅の途上で— 写真提供：岡元一徳



エクスカーション当日は、あいにくの雨模様となったものの、笑顔あふれる楽しい集いとなりました (P.4参照) 【編集後記】
LAST WORD

● 先日、大学2年生の娘が自動車免許を取りました。車好きの自分としては、大学に入ったらすぐにでも取らせたかったのですが「車なんてなくても生きていける」と言ってみると全く興味を示さない娘を「社会人としては持って当然」となんとか説得してこの夏ようやく教習所に通う気になってくれました。

最初がそんな感じでしたので、免許を取っても乗らないだろうなあと思っていたら、免許取得早々に友達とドライブに行くことになり帰ってくるなり、態度が豹変。「パパ、車っていいね」自分の行きたいところに行きたいときに行けるのが気に入った、とのことで、コロナによる外出制限の影響をモロに受けた世代の彼女たちにはこの自由さが強く響いたようです。

若者の車離れが言われて久しいですが、車もまだまだ捨てたもんじやないなと思うのと同時に車好きの責務として車の良さをもっと子どもたちに伝えていかないといけないとあらためて実感しています。

自分が初めて所有した車はトヨタのA E 92型カローラレビンでしたが、その時のうれしさが甦る一方で、次は「パパ、車買って」と来るんだらうなと今から戦々恐々としています。皆様も時には

の向くままにのんびりドライブしてみたいかがでしょうか。【NK】

● 今年に入り、対面でのイベントや出張の機会も増え、助成先の方と直にお会いできる機会も多くなってきました。つい最近も島根の有福温泉というところに訪問してきましたが、企画書だけではわからない地域の温度感や地域背景に実際に触れることができ、現場を訪れ自分の五感で情報を得るの大切さを改めて感じました。

今号の特集では、3月に国内助成グループで実施した「エクスカーション企画」について取り上げました。初めての試みかつ事務局も満足のいくサポートができず、ともにこの企画にチャレンジしてくださった受け入れ団体の皆さんには本当に感謝しかありません。この場をお借りして、改めて御礼申しあげます。

今後不定期ではありますが、このような機会を全国各地の助成先のみなさんとゆるやかに設けていくことが出来ればと思います。また皆さんといつかどこかでお会いできる日を楽しみにしております。【NW】

● 〓 〓 〓 のことや情報をデジタル思考で分割し、数値化して「見える化」することも必要ですが、ときに、境界があいまいなままで数値に置き換えるきかない領域があることも忘れてはなりません。人間の感性は、そのアナログな連続性の領域をとらえるもので、たとえば人間の関係性も「なんとなく」よさそうという、即興的で直感的なユルイ結びつきによってなりたつものがあってもよい。アルumnネットワークという言葉からそんなことを思いました。アナログがデジタルが、対面がオンラインかという「二者択一」ではなく、その両者のバランスをとって生きることが、これからの社会にますます求められてくることではないでしょうか。【I】

● 〓 〓 〓 今号の特集では国内助成プログラムの同窓会企画を取り上げましたが、私が以前国内助成を担当していた当時の助成対象者の方々が独自に集まって視察を行っていたらいいと思います。先日、「JOINT」読者の方にはおなじみの鳴子へ行くとのことでも私も同行させていただきました。その様子はJOINTウェブでご紹介しますのでぜひご覧ください。【YN】

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS



本誌送付先の変更等がありましたら、右のQRコードを読み取ってお知らせください。



JOINT [ジョイント] No.43

発行日 2023年10月19日
発行人 山本晃宏
編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
【TEL】 03-3344-1701
【FAX】 03-3342-6911
【URL】 <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。



公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト
<https://www.toyotafound.or.jp/>



UD
FONT

